

「災害は忘れる間もなく起きる」

山口大学教育学部附属山口中学校 3年 ^{はらだ ゆうき}原田 祐輝

7月28日早朝。まだ、カーテンを引いて薄暗い部屋の中が一瞬、閃光し、同時に地響きのような音がなり響く。突然の音で目が覚め、いったい何が起きたのか分からなかった。そして、息をつく暇もなく、次の瞬間にも、また、閃光と爆発音のような音がなり響いた。外を見渡すと、暴風雨でサッシに雨がまるでシャワーのように降りかかっている。猛烈な雨と風で風景全体が白くなり、遠くは全く見えない。そして、再び雷鳴がとどろいた。

平成25年7月28日の集中豪雨により私の住む山口県の山口市や阿武町、萩市で大きな被害が出たことが明らかになるのは、まだ、その数時間後のことだ。また、今回の大雨が人々の貴重な財産や尊い命をも奪ったということも。

近年は、梅雨や台風期になると、全国のどこかで水害や土砂災害が発生している。山口県でも、平成21年7月に発生した防府市の土砂災害など記憶に新しいものもある。今回の大雨でも川の増水による家屋の浸水や土砂崩れによる家屋の崩壊が発生しているが、一番衝撃的だったのは、各所に発生した土砂崩れにより、道路が寸断され、十種ヶ峰青少年自然の家に小学生など約200名が孤立状態となり、自衛隊のヘリコプターで救助されている映像がニュースで放映されていたことだ。一歩間違えば、大惨事となる状況だったのだ。

科学技術の進歩がめざましい現代においても、私達は自然の猛威の前になすすべもなく押し流されてしまっただけなのか。私は早速、今の情報社会の象徴ともいえるインターネットで「土砂災害」について調べてみた。

「土砂災害・山口県」で検索すると、「山口県土砂災害危険箇所マップ」や「山口県土砂災害警報」といった言葉がヒットした。いったいどのようなものなのだろうか。

「土砂災害危険箇所マップ」とは、要するに土砂災害の恐れがある危険箇所や、災害が起こった時の避難場所が記載されている地図だ。マップを開いてみると、当然山際の多くの地域は危険箇所に指定されていた。浸水被害が起りやすい川の近くの地域も含めると、いつ、どこで災害による大きな被害が出てもおかしくないということが分かった。

また、「山口県土砂災害警報」とは、大雨で土砂災害の恐れがある時、山口県と下関地方気象台が土砂災害の危険性を県民に知らせる情報の一つということだ。

これらの情報は、近年、全国的に整備が進んできた。結局、どの時代においても、自然の力、「大雨」が降ってしまうということは人間の手ではどうしようもないが、危険が迫っているという正確な情報をいち早くキャッチして、素早く対応していくことが、最も重要で効果のある方法ということだ。

こうして調べてみると、あることに気づいた。つまり「情報」はあるのに、うまく「活かせていない」という現状があるということだ。例えば、今回も、「これまでに経験のないような大雨が降る」と、何度も警告が発せられていた。だが、私も含め、いったい何人の人がこの警告に真剣に対応しようとしていたのだろうか。

関東大震災を経験した物理学者寺田寅彦は「天災は忘れた頃にくる」という有名な警句を残している。だが、近年の異常気象により、ゲリラ豪雨と呼ばれる局地的な集中豪雨は、いつ、どこで発生するか予測しにくい。「災害は忘れる間もなく起きる」時代になった。

こうした今に生きる私達が実行すべき最低限のことはなんだろうか。まず、事前にできることは、防災マップなどを確認しておき、家族全員でその情報を共有しておくことだ。そして、いざ、危険な状況になった時は、テレビやラジオ、インターネットなどを通じて発せられる「情報」をしっかりと確認し、迅速に避難することだ。これだけでも命が助かる確率は大幅に上昇するだろう。

思えば、昔から人は自然と共存してきた。数千年前にも災害はあっただろう。そして、時代は変わり、災害の起き方も変わった。しかし、現代には「情報」という新しい武器がある。変わっていく自然と共存していくために、新しい武器、「情報」を活かせるか、無駄にするかで、一つの命を守れるか変わっていくのではないだろうか。一分、一秒後に災害が起きるかもしれない現代で、準備をして早すぎるということはないだろう。今が分かれ目なのだ。「災害は忘れる間もなく起こる」のだから。